

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2025

“ふしぎ文学の達人”が選んだ ^{ゆめ まぼろし}「夢幻」オススメ本

選者：金原瑞人氏
(翻訳家・法政大学名誉教授)



1. 『川端康成 異相短篇集』 川端康成／著
高原英理／編 中央公論新社 2022

◆『雪国』『伊豆の踊子』といったイメージを見事に裏切る、川端康成の異端的怪奇恐怖譚 16編＋随筆3編。特に最初に収められた「心中」、たった2ページの掌編なのだが、異様に怖い。読者はまったくナンセンスで奇矯なイメージの連続に翻弄され、最後の1行で無理やり納得させられてしまう。その他、「地獄」「死体紹介人」「蛇」「赤い喪服」など、悪夢に出てきそうなタイトルが続く。

2. 『夢の狩人』 ニール・ゲイマン／原作
夢枕獏／訳 天野喜孝／画
インターブックス 2000

◆ニール・ゲイマン原作によるアメコミ「サンドマン」のシリーズは世界中のコミックファンを驚かせ喜ばせた。手許のボックスセットには全10巻＋番外編3巻が収まっている。さらにいくつかスピンオフがあって、そのひとつがこれ。ゲイマンが天野喜孝の絵に惚れこんで原作を書き、それを夢枕獏＋小野耕世が訳した。ただしコミックではなく絵本の形になっている。夢の王、夢の狩人、陰陽師の世界を堪能してほしい。

3. 『しじんのゆうびんやさん』 斉藤倫／作
偕成社 2024

◆マスターが犬で、酒といっしょに詩を出してくるバーの話『ポエトリー・ドッグス』の続編的な作品。ちいさな街のゆうびんやさんが、あることをきっかけに、街の人たちに、ひとつ、またひとつ、詩を書くことになる。その詩も素敵だけど、それぞれのエピソードがまた素敵だ。そして最後に明かされる、ゆうびんやさんが配達に出ない理由がいい。締めくくりの言葉も詩じゃないのに、詩にしか読めない。魔法のような、夢のような物語。

4. 『クリーチャー：絵、スケッチ、そしてエッセイ』
ショーン・タン／著 岸本佐知子／訳
求龍堂 2024

◆文字のない長編絵本『アライバル』で世界をあっといわせたショーン・タンが幼い頃から描いてきた様々な生き物(クリーチャー)を収録した1冊。かわいいものもあれば、恐ろしいものも、わけもわからないものもある。タンはこうしている。「人類だって(中略)語りかけ、声を聞き、ただ黙って並んで座って、自分たちがそもそもこの世に存在していることの奇妙さをしみじみ噛みしめる、そんな仲間を」探し求めているんじゃないか。

5. 『氷河期』 ニコラ・ド・クレシー／著
大西愛子／訳
小学館集英社プロダクション 2010

◆バンドデシネといえば、まずこの人。SF仕立てで、氷河期をなんとか生きのびた人類の末裔が(動物たちも遺伝子操作で人と話ができるようになっていて)雪と氷の世界を探検して、ルーヴル美術館を発見、先祖たちの社会、文明、文化について考えるというコミック。ルーヴルの91の作品が散りばめられている。絵は思いきりアーティストティックだけど、しっかりコミックしている。

1.『雪女・吸血鬼短編小説集』

ラフカディオ・ハーンほか／著
下楠昌哉／編訳 平凡社 2025

◆異色のラフカディオ・ハーン＝小泉八雲関連本を、もう一冊。気鋭のアイルランド文学研究者の編訳による本書は、八雲がいち早く関心を寄せた「女性吸血鬼」に関する珍しい作品群に加えて、それらと併読されるべき古今の吸血鬼小説を集めて成った、貴重なアンソロジーである。来日する以前から、ハーン／八雲があの「お化け好き」だったことを、雄弁に実証する作品群でもあって、実に興味深いものがある。

2.『とつこ』かときちどんぐりちゃん作品集

かときちどんぐりちゃん／著
信陽堂 2025

◆あの宮沢賢治を生んだ東北の大地から、東日本大震災の傷ましい記憶を濃厚に留めた、素晴らしい才能が、いま新たに登場した。一見すると「コマ割り漫画」風の体裁だが、そのどれでもよい、じっくり読み込んでみれば、その濃厚な物語性（まさに、賢治にも匹敵するような、それ！）に驚かされることだろう。事実、表題作を何の気なしに読み始めた私は、読了時には涙ぼろぼろ、そればかりか、後にも折にふれ思い出しては涙することになった。いやはや、怖ろしい本である。

3.『廃線だけ 平成・令和の棄景』 丸田祥三／著

実業之日本社 2025

◆廃線＝すでに廃止された線路や駅の「遺影」をこよなく愛し、撮影し続ける、異色のカメラマンである著者による、久々の「廃線」作品集。かつての栄華はどこへやら、今は都市開発の怒濤に呑み込まれたり、ふたたび旺盛な大自然に埋没しかかっている線路の痕跡が、しっかりとフィルムに記録されている。これまた、今は「幻想」の彼方に去った「束の間の幻影たち」の面影といえるのではなからうか。

選者：東雅夫氏

(アンソロジスト・文芸評論家)



選者コメント

4.『怪獣談 文豪怪獣作品集』 武田泰淳ほか／著

東雅夫／編 平凡社 2025

◆今は「怪奇幻想専門のアンソロジストでござい！」と、行ないすました顔をしている私だが、実は、生まれて初めて出版したアンソロジーは、怪談ならぬ「怪獣」がテーマだったのだ！ 河出文庫から一九九八年八月に刊行された『怪獣文学大全』である。個人的には思い入れのある本だったので、いずれどこかで復刊を、と狙っていたら、平凡社さんが声をかけてくださった。一部収録作を差し替えて、三島由紀夫と東山魁夷の、愉快な怪獣往復書簡まで再録。お試しあれ！

5.『筑前化物絵巻』 近藤瑞木／編

京極夏彦／序 河出書房新社 2025

◆開運なんでも鑑定団」というテレビ番組がある。たまに、エエッと視聴しているこちらが驚かされるような逸品が登場したりするので、つつい見入ってしまうのだが、同番組で、多くの「お化け好き」諸賢を瞠目させた未知の妖怪絵巻が、このほど単行本化された。編者が、私もお世話になっている国文学者の近藤瑞木さんなので、これは安心。珍しい妖怪たちの競演に、思わず目が和む。